

## 27 本と本棚について私が考える二、三の事柄

開高健氏は「珠玉」（1990年刊）の中で、「ロンドンについて何でもいから忘れられないこと」を書くよう依頼されたら、何日間か「追憶を反芻して愉しむことができる」と書いたが、私なら「夢の本棚を作るなら」という質問が一番楽しめそうな気がする。部屋には年間を通して室温20度・湿度50%を維持できる空調システム。紫外線等の有害な光線は本を劣化させてしまうから、室内灯も美術館用など特殊なものがいいだろう。だが、何より大切なのは本の配列。作家ごとにするのもなければ、本屋のようなジャンルごと、大学図書館のようなアルファベット順にするのでもない。私の考える夢の本棚は「子どもの頃から今にいたるまで、読んだ本を順番に並べていったもの」である。その時に何に興味関心を持っていたのか、どのように知識や教養を身につけていったのか、その詳細な記録であり、成長のアルバムともいえる。そして、日記を読み返すように、その時の本を読み返す。そんな本棚の本なら傷みや汚れも愛しく思えるかもしれない。

そうは言っても、すでに終活期。壁があったら絵を掛けるより本棚を置くという年齢ではない。本はみかん箱2箱しか手元に置いてはならないと、今の国会で決めてもらっても構わない。ならばオーバーした本をどうするか。もちろんゴミ箱に捨てるなどではしません。ブックオフでも、古いものは「お持ち帰りになりますか、こちらで処分しますか」とむごたらしいことを言われます。ちなみに、昨年本校図書館が除籍した本は625冊。処分ではありません、あくまで除籍です。知識をひけらかしますが、江戸時代は新本を買う習慣はなく、本は貨幣と同様に社会を循環するものと思われていて、読書家が亡くなればその書庫の本は再び世に出たそうです。実家で父の本棚にある本を読んでいたら、「いつも、このライターいっぱい油をつめて、旅に出る。そして、油のある限り、気ままに釣り歩くことにしているんだ。その代り、油が切れたら。おとなしく、旅を打ち切る」という退職した商社マンの言葉に鉛筆で傍線（城山三郎氏の「毎日が日曜日」より）。線を引いたのが父なのか兄なのか。はたまた、いつ引いて、その時に何を思っていたのか。そんな思いにふけると、やはり本は簡単に捨てられないわけである。

さて、栃木刑務所が業務逼迫を理由に、受刑者の本の受け入れ冊数を大幅に制限したのを、今年の2月に東京高裁は違法であると判決。他者への共感力や社会適応力などを養うという読書の効用が認められたわけだが、東京大学名誉教授の佐藤学氏もA1時代の到来の中、読書の喜びと習慣を育まない限り、子どもたちの将来も日本社会の未来もないと述べています。まずは大人が子どもの手本になって、読書に勤しんでもらいたいものです。

最後にちょっと違う本の楽しみ方を二つだけ。一つ目は趣味の世界を本で楽しむ方法。例えば「ステューリー・ダン大事典」という本。ステューリー・ダンはアメリカンロックを代表するバンドの一つ。その楽曲は多様性を持ち、歌詞も難解ですが、アルバムごと一曲一曲の分析を読み進めると、新たな発見もあり、楽しいです。芸術や旅行本の楽しさはそういうところなんでしょうね。二つ目は名作を朗読で楽しむ方法。新潮CDやラジオ番組などで聴けますが、「耳で聴く」と目で読むのと違う世界が広がります。昔の文章は声を出して読むことを前提に書かれた側面もあるので、本を耳で聴くというのも正しい楽しみ方の一つだと思います。生徒には優しい国語科の先生方にぜひ、朗読をおねだりして欲しいものです。

令和6年6月1日 大村城南高等学校長 中小路尚也